

足利家と上杉家が関東をふたつに割って大乱としていた時代、諸豪族はどちらかに属して戦いを繰り返していた。

里見刑部大輔義実。

足利成氏の近くに仕えていた彼は、鎌倉府の直轄領が多い安房国へ赴き

「上杉勢力を駆逐するよう」

命じられた。

彼は三浦半島から渡海し、白浜野島崎に上陸した。これはかつて、源頼朝が石橋山を逃れて房総に赴いた故事に肖る瑞兆祈願という意味もある。もともと縁起担ぎも大事だが、白浜上陸には理由がある。

白浜は在地勢力上、上杉の与党が存在していた。里見義実はこちらを武力討伐する必要があったのである。

義実という武将の性格を伝える史料は希薄である。このことは推察も多分に求められるが、恐らく里見義実は、剛勇に頼る性格ではなく、むしろ柔軟に対局を睨む知将だったのではなからうか。武力一辺倒に奔ることなく、調略を駆使して、在地豪族の状況を切り崩していったことは想像に易い。

「お命じくされば、必ずや手柄を立てましょう。上杉方の安西めは、憎んでも足りぬ輩にて、何卒御下知を」

そう詰め寄ったのは、在地豪族で足利寄りの丸氏・神余氏であった。

里見義実が上陸する以前、この安房郡で紛争があった。神余氏は家臣・山下定兼の謀叛により当主が討たれ、その山下氏へは安西景春・丸信朝が攻め込んで討った。そしてその領土分配をめぐり、安西景春は丸信朝を討ってその領土をも横領したのである。

だから古河公方の威光を持つ里見義実に荷担し、安西氏を討つのは彼らの悲願であった。

安西景春は機を見るに聡く、このとき早期のうち以降伏恭順を示した。里見義実は不満分子を抑えて、その降伏を許した。神余・丸等の不満を逸らすため、里見義実が安西景春に先鋒を

命じて長狭郡の東条左衛門重永を攻めた。義実が安房で勢力を固めるために拠点としたのは、白浜城である。

通説では、この義実こそ、戦国期の安房里見氏初代という。

里見義実が安房切取りのために乗り込んだ訳ではない。その時点で足利成氏より袂を分かつてなければ、辻褄が合わなくなる。

あくまでも御身は、このとき足利成氏の勢力として、安房の上杉勢力を駆逐するために上陸したのだ。

このような方面軍を、足利成氏は余所にも展開している。

房総半島は足利・上杉が入り乱れる係争の地だ。安房のみではない。成氏は下総古河に構えて四方を睨んでいる。残るは上総。ここに、義実の同輩である武田信長を差し向けていた。

古河公方は上杉家を否定し、関東の秩序を取り戻そうとしていた。

そのために、信任のおける者たちを各地へ派遣したのである。里見義実もそのひとりだった、というわけである。

里見義実に求められたのは、江戸湾をはじめとする海上拠点を確保だ。その期待に、義実は応えた。在地豪族を束ねると、その勢いを重ねて安房郡・平群郡へと影響力を持ち、海賊衆を手懐けていった。これが水利に大きな影響を持つことを、義実が弁えていた。

白浜に上陸した義実が、外海を一望する白浜城に拠点を構えた。

その白浜城の西にある下立松原神社に平定祈願をしたのも、理由がある。

安房国は、鎌倉将軍・源頼朝の回天縁起の地である。義実が祈願事に関しては、とにかく頼朝に肖った。

縁起担ぎは、武士の世界では大事なことである。この効果が、戦わずして相手を屈することに繋がることを、義実が知っていた。

こうして、里見氏は安房を平定したのである。「丸殿も神余殿も、かくなるうちは安房の静謐を望んではもらえぬか？」

安西景春への恨みを抱く両名に、里見義実は中立を保った。こうして古河公方に服する以上、双方とも形式的には和睦をすることが望ましい。「刑部大輔様の仰せとあらば……」

丸氏・神余氏等はこれ得心した。無論、狙われる側の安西景春も同様で、これにより里見義実へ忠節を誓ったのは申すまでもない。

安房より上杉勢力を一掃すると、並の者はすぐに支配者となるべく領内整備を急ぐところである。

が、義実はこちらに着手しなかった。

足利成氏の命令は、上杉勢力の一掃である。支配者となることではない。ここが難しい解釈だ。国盗りに来たのではなく、古河公方の代官として留まるのである。

そのため、在地の殆どを温存し、まずは里見氏に靡かせることのみに腐心したのである。

この効き目はあった。

古河公方の威光のもと、在地豪族は里見氏の臣下を誓った。たぶんそれは、義実の人格が敬われたに相違ない。安房府中国府の権限も、里見氏の影響下に屈したのである。

義実の後継者は上総介義通である。

この頃になると、関東に新しい風雲が吹き荒れようとしていた。

古河公方を凌駕する才人・太田道灌は上杉家臣であったが、その才覚を妬む主君に暗殺された。途端、上杉家は屋台骨が揺らぎ、それを計ったように、箱根の向こうから新興勢力として伊勢宗瑞が台頭してくる。

伊勢宗瑞。

後年、北条早雲と呼ばれる人物である。

上杉の勢力を食い荒らされ、小田原に居を構えた早雲は、三浦氏を滅ぼして江戸湾を経て里見氏と直接対峙することとなる。

この物語は、江戸時代の読本作者・曲亭馬琴の綴りし伝奇戯作『南総里見八犬伝』の評判により、二百年もの刻、埋もれてきた史実を基に描くものである。

累代の里見氏は、どのように興り、どのように滅んでいったのか。

世間に知られぬ知名度だけは高い一族の、知られざる物語である。

房総里見家を綴る歴代のなかから、本編は里見義通の代から書き始め、武勇で戦国を押し渡った里見義堯が当主となるまでの戦国黎明の時代を描きたい。

十十十

関東争乱(4)

夢酔 藤山